

訪問日：2017.9.20 / エリア：京都

京都市修徳児童館



回答者 木戸 玲子さん(京都市修徳児童館館長)

活動の経緯

館長として修徳児童館へやってきて、修徳の地域や松原の商店街では、歴史があること、まちづくりに力を入れていることが分かりました。ただ、まちづくりに参加する子どもの姿がないと感じて、児童館と地域で何かをしたいという話を地域の人にしていきました。児童館というと学童クラブと見られることが多いですが、遊び体験を通して、子ども(0~18歳)や親支援もしていく場所なんです。子どもを分かってもらいたい、子どもが元気であることは地域の宝なんだと知ってほしいと思い、地域の人に話をしに行くことをしてきました。

一方通行で地域の人に協力してください、ではなく、その人が持っているもの、やりたかったこと、困っていることを出してもらって、一緒に事業にするということをしています。

助成金の運用について

指定管理者の事業費だけでなく、助成金を得て活動をしています。国や地域が必要であると認めた課題に対して、児童館がどう答えるかということを考えることを大切にしています。

下京区の区民が主役のまちづくりサポート事業の助成金では、三世交代として、地域の高齢者の孤立を防ぐために活用しています。地域包括センターに協力いただき、一人暮らしの高齢者のおうちを子どもと訪問し、お茶会で使える招待券を配り、児童館横の地域の公園で行うお茶会に出てきてもらう、ということをしています。孤立を防ぐというだけでなく、ご近所の人と高齢者の交流の場、手伝ってくれている下京中学校の伝統文化部の生徒さんも地域の人と交流してもらえる場所になっています。

京都市地域子育て支援ステーション事業や、児童館以外の場所で、地域の子育てを支援する活動への助成を得て、NPOと地域の活性化にも参加しています。

児童館の外に出て、地域の中で活動をするというのは、助成制度を知ったことからもらったアイデアですが、そのおかげで児童館とそれぞれ地域の団体の関係だけでなく、横のつながりで何か一緒にやりませんかということになったり、児童館に声を掛けてもらえるようになったり、色々な化学変化が起きています。

児童館のパートナーとしての地域

地域には、何かしたいと思っている面白い人が多いです。ただ、劇団や大学生の団体など、子どもと関わろうと思っても、小学校などではよく分からない団体として受け入れてもらえないことが多いそうです。児童館には子どももたくさんいるし、つながることのできる場所だと思っています。

松原商店街は、子どもたちが通るときに声を掛けてくれるといった見守りをしてれています。そこで、子どもまちづくり委員会を作って、まち歩きのコースを子どもと一緒に回って作ったり、買い物ゲームをする場所にさせてもらったりしています。出会ってほしい街のレジェンドの写真を子どもに持たせて、レジェンドを探す企画をしたこともあります。

劇団の方々が関わる活動では、サンタが地図を無くしたから、物語の中でまち歩きをして、地図を探してくる、最後にチームで印象に残ったことを身体表現にして発表するといったことをしています。

アートの役割、児童館の役割について

文化芸術が関わることで、一つひとつの活動の中で専門性を体験してもらえると思っています。本物の俳優さんや本物の職人さんに出会って何かをする体験は、私たちだけで用意するものとは違います。

伝統文化を守っていくのも大変だけど、小さいうちに、ものづく

0歳から18歳までの子どもを誰でも受け入れ、子育て中の人、妊婦さんたちがフラダンス、手芸等のサークルや子育て支援活動を受けられる場所にもなっている。学童クラブのほか、児童館の外で行う地域のまちづくり活動を実施し、子どもの育成、商店街やNPO団体、高齢者などとの交流を行っている。

〒600-8449
京都市下京区新町通松原下る
富永町110-1
TEL/FAX: 075-353-6399

りの場に出会う機会がないと、そもそも興味を持ってもらえないと職人さんから話を聞いたこともあります。表現が過激になってしまって、いつも怒られているような子どもの表現も俳優さんがうまく取り上げてくれて、その子どもが輝いているときもありました。本物に会うと子どもの持つ感性が生かされると感じます。

きちんと学校に行き、就職し、立派なサラリーマンになるというような価値観は強いですが、ただ決まった枠の中だけで評価するのではなく、子どもが何かをやりきって、地域の人に褒めてもらったり、色々な大人に出会ったりして、なれる大人のモデルが増えていくことは、生きていく中で貴重な体験だと思っています。それによって、人生で次にやりたいことを語るようになることもあるはずですが、児童館はその橋渡し、きっかけづくりをしたいと思っています。

また子どもが地域の中で動き、人と出会うことで、若いお父さん、お母さんにもまちのことや地域で行なわれている仕事、地域の文化を知ってもらうことができます。その結果、大人の側が多様な価値観を認め合えるようになることもあります。

こだわりがとて強く、一つのことだけに集中することはできるけど、うまく他の子どもと関われない子もいるので、子ども職人というイベントを企画して、こだわりを表現してもらえる場所を作りました。そうするとお母さんが、「うちの子どもにはこんな道もあったんだ、これで生きていけるのかもしれない」とおっしゃっていました。児童館での経験で、お父さん、お母さんの考えが広がるきっかけにもなるのだということが分かった出来事でした。